題　名　屠所の羊　中　白い羊

作　者　ドーナツ

発行日　2015年1月24日発行

連絡先　twitter：@donut_no_ana

tumblr：http://donut-st.tumblr.com/

※ horirium 様（@horirium）の考案された折本デザイン、楠木暖様（@kusunokidan）の作成図を使用しています。

屠所の羊　中

白い羊

屠所の羊　白い羊

1

「ヨシュア！」

倒れているヨシュアにカレブがかけ寄る。恐ろしいような声に二人の耳は聾された。牙をむき出した獣が二人から身を屈め、カレブはキノコの採集に夢中である。ヨシュアの足は香りの行方を追いかけた。だが、赤い花を見たと思った途端、地面に叩きつけられる。ヨシュアは肩の痛みに悲鳴を上げた。

「足元に気を配って。意外なところに生えてるんだから」

湿った森の空気の中を苔に混じって、甘い香りが漂ってくる。ヨシュアは周囲を見回した。

2

少し離れ、赤い目でこちらを睨んでいる。

「クソ！」

ヨシュアは立ち上がりざま、苦痛に悪態を吐いた。足首をひねったらしく、まともに歩くことはできない。

「駄目だよ。動いちゃ。じっとしてて。どうせあそこから入ってこれない」

土の上に石が並んでいた。その外側から身をのり出している獣の片目は潰れている。顔を曲げるようにして傾け、残った目をヨシュアへ向けていた。しかし、次の瞬間には天へ口を開き、遠吠えを始める。

切る

折る

山折り -------- 谷折り

屠所の羊　白い羊

11

前の穏やかな快晴である。ヨシュアは室内に飽き飽きし、家の扉を押し開けた。途端に温かな日差しがヨシュアへ降りそそぐ。足は痛むが、歩行を続けられないほどではなかった。肩が無事な右手だけを上げ、伸びをする。ヨシュアは思いきり、戸外の空気を吸いこんだ。

畑の土と堆肥が臭気を放っている。それらを抜ければ、村を一巡している道へ出た。誰もいない。みな集会所か屋根のふき替えに忙しいのだろう。

ヨシュアは、さらに外れて森の薄闇へと足を踏み入れた。さきほどまでの陽気が嘘のように森は、冷え冷えとしている。振り返ったヨシュアの目に天へと続く柱が輝いていた。中央の広場に屹立している透明な筒である。

故のない恐れがヨシュアを苛んだ。慌てて目を逸らし、森の奥へと歩んでいく。

12

ヨシュアの前に村の境を表す石が並べられている。越えないよう注意しつつ、木々で狭まる風景に目をやった。視野の端で赤い花びらが揺れている。ヨシュアは思わず、身をのり出した。

その時、木々の間から黒い影が姿を現す。ヨシュアを突き飛ばし、散々な境遇に追いやった『人』だった。

昨日同様、顔を曲げ、潰れていないほうの目をヨシュアへ向けている。しかし、黙はぼってはおらず、歯をむき出しているわけでもなかった。犬たちが村の守護を担っているというエリの話は本当らしい。

「ハカ！」

ヨシュアは獣を怒鳴りつけた。

「開拓け！　クタバレ！」

獣は四足歩行、体長は優にヨシュアの三倍はある。上半身が大きく隆起した堂々たる体躯だ。（つづく）

屠所の羊　白い羊

3

「何？」

ヨシュアは目を瞬った。

「じゅん、ヨシュア。先ほど言ってお伝えは良かった。村の境から出たら駄目なんだ。大人たちは、ぼくらを守ってくれているんだ。だから口から光を発し、その柱は、真直ぐに空を貫く。やがてロから融通がきかない」

「あー、あ。神様に言いつけられちゃったね。でも、大丈夫だよ。手紙に事情を書いておく」

カレブに助け起こされ、ヨシュアは村へと戻った。

4

「災難だったね」

集会所の一角でヨシュアは、手当てを受けていた。部屋の中央で椅子に腰かけ、カレブを含めた九人が車座になっている。カレブたちは、ヨシュアの傷の香りが漂う薬の容器から放たれていた。

「ああ、ぼくはいいんだ。もう引退」

対するエリは、掌をヨシュアの前へ広げる。大きくはっ

屠所の羊　白い羊

5

きりと『1』、『4』と記されていた。

「十四年？」

「うん。だから、もうああいうの飽きちゃった」

エリは、この村の最古参である。しかし、他の者と変わらず、子供のままだった。

「どうして村の境を越えようとしたの？」

「花が」

言い淀むヨシュアにエリは、首を傾げる。

「花？」

「うん。赤い花が咲いてて。そこまで行きたかった」

割って入ってきたカレブにヨシュアは、頷いた。

「エリ。面倒見てくれてありがとう」

「ううん、いいんだ」

エリは、青白い顔に微笑みを浮かべている。

明日、エリの家の屋根をふき替えるお手伝いをしようと思った。ヨシュアに留守を頼むつもりらしい。

「ふまあないけど」

ヨシュアの前に端切れと針、木綿糸が一本、並べられた。

屠所の羊　白い羊

7

エリは吹き出した。

「きみって、なんだかすごいねえ。森には、恐ろしい怪物がいるんだ。ぼくたちを食べちゃうんだよ。それで犬たちは村の境を守ってる。境を越えてくる怪物と争ってるのさ」

「怪物？」

頭を掻こうとしたヨシュアは顔をしかめる。

「肩を動かしちゃ駄目だよ。足は、固定したから痛みはそれほどでもないと思うけど、どうかな？」

肩と足に包帯を巻いたヨシュアは満身創痍だ。エリに手伝われながらシャツに袖を通す。袖のボタンを留めていた

屠所の羊　白い羊

9

「一人じゃ不自由だろうけれど、よろしくね。退屈だと思うから縫物の練習でもしてて」

「縫物？」

カレブは目をすがめ、針と糸を通している。続ぎ目は作らずに左へ運針して見せた。糸が等間隔に布を貫通していく。

「自分の服を縫えなかったら人笑だよ。上手くできるようになったらボタンつけも教えるね」

糸を抜き、カレブは針を布へ留めた。

「はい、頑張ってー」

屠所の羊　白い羊

8

ヨシュアの前に端切れと針、木綿糸が一本、並べられた。

屠所の羊　白い羊

10

午前中いっぱい運針に励んでみたが、カレブから返ってきたのは苦笑いである。

「じゃあ、行ってくるね」

カレブを見送り、ヨシュアはテーブルに端切れと針を放り出した。人間には向きと不向きというものがある。ヨシュアに縫線の才能は欠片もなかった。痛む指に悪態を吐きながら、茶を淹れた白湯の残りを流しこむ。

窓から眺める空は青く澄みきっていた。冬がやってくる